

書評

工藤翔二 監修
木田厚瑞, 久保恵嗣, 木村 弘 編

チーム医療のための呼吸ケアハンドブック

秋田看護福祉大学・学長

佐々木 英 忠

ケアという言葉が盛んに用いられるようになったのは十数年前からである。従来、在院日数の制限がなく長期療養ベッドもお構いなしであったが、医療費の高騰を避けるため、社会的入院ともいうべき長期療養患者は病院から締め出されることとなった。それにより、大病院であればあるほど患者は急性期疾患のみを診療するという建前のもと、在院日数は短ければ短いほどよい病院であると評価されるようになった。

呼吸器病床では、酸素吸入のためだけに入院しており在宅に戻せない COPD をはじめとする患者にかなりの病床を占められていたが、在宅酸素療法の導入によって、長期療養患者は退院可能となり、他科の在院日数短縮の方針と

歩調を合わせることができた。

ここで病院は急性期疾患を専門に診療するという大前提が整ったが、患者(特に高齢の患者)は急性期を乗り切っても直ちに回復するわけではなく、社会復帰となればさらに程遠いという実態が待っている。医学の粋を集めた専門集団である大病院が、急性期を乗り切ってもまだ回復には程遠い患者に対して、退院後はどうぞ好きなようにして下さいといわば投げ出すことは、すこぶる実態にそぐわないことになる。多くの患者は退院後に完全に回復するまで、または回復しなければそれなりの療養が切り離せない。

このような退院後の患者の療養には医療と看護・介護の両輪が必要となってくる。従来は医療の確

立に多くの時間と労力が割かれ、看護・介護にはそれぞれの専門職の細々とした努力はあったが、医療に携わる専門職の目は向けられていなかった。しかし、例えば在宅酸素療法が COPD の延命効果としてこれまでのどの薬物療法やその他の医療行為よりも寄与するなどのエビデンスが明らかにされるに及んで、看護・介護は医療と同等に重要な役割をもつことが明確になってきた。

本書は、早くから医療とともに看護・介護が重要と考えてこられた、日本の呼吸器学分野の最前線で御活躍されている医療専門職の方々によって書かれている。呼吸ケアの重要性について今日得られる最先端のエビデンスに基づいて解説された貴重な参考書である。内容は平易でわかりやすく、呼吸器に携わるチーム医療をスムーズに行うための参考書となっている。

〔A5 頁 312 2009 年 定価
4,410 円(本体 4,200 円+税 5
%) 医学書院刊〕